

1-8 ドイツ文学

研究・教育活動の概要と特色

ドイツ文学専攻分野（以下、本研究室）は、1924年（大正13年）の設立以来、堅実な文献学的手法によるドイツ文学研究を研究・教育の基本として発展してきた。研究対象としては伝統的にゲーテやロマン派が中心であったが、初代教授小宮豊隆以来の比較文学的研究や、戦時中在職したカール・レーヴィットの影響を受け継ぐ思想系の研究などにも特色がある。現在のスタッフのうち、哲学出身の森本は、言語や芸術をめぐる理論的な研究を専門とする。05年度着任の嶋崎は、先端的な言語学的手法を取り込んだドイツ語学の研究者であると同時に、中世以来のドイツ語史にも詳しい。また外国人教員（教授）のシュミッツは、トーマス・マンやゲーテの研究者として、本研究室の中核であるドイツ文学の研究・教育を支えている。なお2008年在職中に病没した前教授原研二とシュミッツは、ブルクハルト財団により編集が進められているブルクハルト全集の『イタリア・ルネサンスの文化』の巻の歴史校訂版編集に携わっている。

教育面においては、まずドイツ語力、特に文学的なテキストを正確に読む力の養成を主眼としている。伝統的な目標であるが、人文学研究のスキルとエトスを学ぶためには不可欠の要素であり、学生の多くもこの方針に満足している。同時に近年は、外国人教員を中心としたコミュニケーション能力の訓練に力を入れるとともに、学生の様々なニーズに応えるべく、スタッフの専門領域の幅広さを活かした授業内容の多様化に努めている。なお、本研究室のスタッフは、全学教育（一般教育）科目「ドイツ語」を担当するとともに、研究科および大学の教育関連諸業務において、ドイツ語の専門家としての立場から貢献している。

I 組織

1 教員数（2009年9月末現在）

教授：2

准教授：1

講師：0

助教：0

教授：森本浩一，ブリギッテ・シュミッツ

准教授：嶋崎啓

助教：0

2 在学生数（2009年9月末現在）

学部 (2年次以上)	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生
29	1	6	5	0

3 修了生・卒業生数（2005～2009年度）

年度	学部卒業生	大学院博士課程 前期修了者	大学院博士課程 後期修了者 (含満期退学者)
05	6	1	2
06	0	2	0
07	6	2	0
08	6	1	0
09	0	0	0
計	18	6	2

* 2009年度は、9月末までの数字

II 過去5年間の組織としての研究・教育活動（2005～2009年度）

1 博士学位授与

1-1 課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
05	0	1	1
06	0	0	0
07	0	0	0
08	1	0	1
09	0	0	0
計	1	1	2

* 2009年度は、9月末までの数字

1-2 博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

依岡隆児，2005 年度，『ギュンター・グラスの内省的語り——語りの構造と媒体性の考察』

審査委員：教授・原研二（主査），教授・齊藤征雄，教授・森本浩一

竹内拓史，2008 年度，『ゲオルク・ビューヒナーの自然科学研究と文学——宿命論的世界観を媒介として』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・原英一，准教授・嶋崎啓

2 大学院生等による論文発表

2-1 論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
05	2	0	0	0	2
06	1	1	0	0	2
07	0	0	0	1	1
08	3	1	0	3	7
09	1	0	0	0	1
計	7	2	0	4	13

*2009 年度は 9 月末までの数字。ただし、以後の掲載が決定しているものも含む。

2-2 口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
05	0	2	1	0	3
06	0	1	0	0	1
07	0	3	8	0	11
08	0	3	9	1	13
09	0	2	7	0	9
計	0	11	25	1	37

*2009 年度は 9 月末までの数字。ただし、以後の発表が決定しているものも含む。

2-3 上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

(1) 論文

川村和宏「エンデと『メルヒェン』——資料からみるエンデのゲーテ，『メルヒェン』受容」，『東北ドイツ文学研究』49 号，2006 年。

川村和宏「『メルヒェン』と『ファウスト』——ゲーテの『メルヒェン』を錬金

- 術として読み解く」, 『茨城大学独文学論集』2号, 2006年.
- 川村和宏「書簡から見るエンデと貨幣論——『鏡の中の鏡』第四話執筆とゲゼルの利子論」, 『東北ドイツ文学研究』51号, 2008年.
- 野内清香・石川榮作「『ティードレクス・サガ』におけるグリームヒルトの復讐」, 『徳島大学総合科学部紀要「言語文化研究」』13号, 2005年.
- 渡辺美奈子「愛のない心とは……韻のない詩のようなもの——『冬の旅』から「おやすみ」の韻律と分析」, 『東北ドイツ文学研究』51号, 2008年.
- 渡辺美奈子「辻音楽師（ハーディ・ガーディ弾き）」, 国際オルゴール協会日本支部編『自鳴琴』30号, 2008年.
- 嶋崎順子, 『ジャン・パウル中短編集 II』(翻訳, 恒吉法海・藤瀬久美子との共訳), 九州大学出版会, 2007年.
- 嶋崎順子「ジャン・パウルにおける比喩の諸相——『見えないロッジ』を中心に」, 『東北ドイツ文学研究』51号, 2008年.
- 橋本由紀子「異界からの訓言——エンブレムの構造から読むゲーテ『ファウスト第一部』」, 『東北ドイツ文学研究』52号, 2009年.
- 加美山若菜「ウィーン工房——モノトーンと四角形の小箱」, 『世紀転換期研究——都市・人・文学（文化研究報告第1輯）』, 2009年.
- 小田嶋大「世紀転換期ドイツ語圏の音楽——ヴァーグナー, マーラー, 第2次ウィーン楽派を中心に」, 『世紀転換期研究——都市・人・文学（文化研究報告第1輯）』, 2009年.
- 渡邊紀子「救済と絶望と——ココシュカ『風の花嫁』をめぐる考察」, 『世紀転換期研究——都市・人・文学（文化研究報告第1輯）』, 2009年.

(2) 口頭発表

- 竹内拓史「天才への憧憬と失望——ビューヒナーとレンツのドラマツルギーについて」, 第26回ドイツ語圏文化研究会, 2009年6月19日.
- 川村和宏「エンデと『メルヒェン』」, 東北ドイツ文学会第48回研究発表会, 2005年10月22日.
- 川村和宏「エンデの『道しるべの伝説』に描かれる錬金術について」, 東北ドイツ文学会第49回研究発表会, 2006年11月3日.
- 川村和宏「資料から見るエンデの貨幣論」, 日本独文学会春期研究発表会, 2007年6月6日.
- 川村和宏「書簡から見るエンデと貨幣論——『鏡の中の鏡』執筆とゲゼルの利子

- 論」，東北ドイツ文学会第 50 回研究発表会，2007 年 11 月 10 日。
- 川村和宏「ヨーロッパ文化概論 III（集中講義）」，茨城大学人文学部，2008 年 2 月 11 日～2 月 14 日。
- 川村和宏「ゲーテ『メルヒェン』と『ファウスト』冒頭部の照応について——錬金術としての解釈の可能性と意義」，第 13 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 5 月 9 日。
- 川村和宏「続・書簡から見るエンデと貨幣論——『鼠取り男』におけるエンデの貨幣論と錬金術思想の系譜」，東北ドイツ文学会第 51 回研究発表会，2008 年 11 月 15 日。
- 川村和宏「ミヒャエル・エンデのゲーテ『メルヒェン』受容——シュタイナーによる解釈との関連を中心に」，日本独文学会秋期研究発表会，2009 年 10 月 18 日。
- 川村和宏「『メルヒェン』に敷衍されたファウストの黒い厨」，東北ドイツ文学会第 52 回研究発表会，2009 年 10 月 31 日。
- 野内清香「何故ハゲネはジーフリトを殺したのか」，日本独文学会春期研究発表会，2005 年 5 月 3 日。
- 野内清香「『ニーベルンゲンの歌』のハゲネに見る異教の残映」，第 2 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 9 日。
- 野内清香「『ニーベルンゲンの歌』における滅びの運命——ニーベルンゲン財宝と忠臣ハゲネ」，第 14 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 5 月 14 日。
- 渡辺美奈子「時代は芸術を支配する——ヴィルヘルム・ミュラーの詩と生涯」，第 4 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 25 日。
- 渡辺美奈子「ミュラー『冬の旅』における韻律」，第 11 回ドイツ語圏文化研究会，2008 年 1 月 11 日。
- 渡辺美奈子「愛のない心とは何か……韻のない詩のようなもの——『冬の旅』から「おやすみ」の韻律と分析」，ゲーテ自然科学の集い・東京例会（慶応義塾大学三田キャンパス研究室棟），2008 年 4 月 6 日。
- 渡辺美奈子「『冬の旅』における誠実」，東北ドイツ文学会第 51 回研究発表会，2008 年 11 月 15 日。
- 渡辺美奈子「人生の愛と歌——ヴィルヘルム・ミュラーの『冬の旅』」，第 25 回ドイツ語圏文化研究会，2009 年 6 月 5 日。
- 嶋崎順子「ジャン・パウル『陽気なヴッツ先生』におけるメタファーについて」，第 4 回ドイツ語圏文化研究会，2007 年 5 月 25 日。

嶋崎順子「ジャン・パウルにおけるメタファーの諸相——『見えないロッジ』を中心に」, 東北ドイツ文学会第 50 回研究発表会, 2007 年 11 月 10 日.

橋本由紀子「自己点検的構成——ゲーテ『ファウスト第一部』の構成にみるバロック性」, 第 15 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 5 月 28 日.

橋本由紀子「異界からの訓言——J.W.ゲーテ『ファウスト第一部』におけるエンブレムの構造」, 東北ドイツ文学会第 51 回研究発表会, 2008 年 11 月 15 日.

橋本由紀子「ドイツ・バロック文学について」, 第 24 回ドイツ語圏文化研究会, 2009 年 5 月 27 日.

八田卓也「薔薇十字運動概観」, 第 5 回ドイツ語圏文化研究会, 2007 年 6 月 8 日.

八田卓也「薔薇十字思想の系譜」, 第 16 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 6 月 6 日.

中川美雪「『ニーベルンゲンの歌』写本について」, 第 5 回ドイツ語圏文化研究会, 2007 年 6 月 8 日.

一山貴史「『ニーベルンゲンの歌』における人物の描写と実像の矛盾」, 第 5 回ドイツ語圏文化研究会, 2007 年 6 月 8 日.

加美山若菜「80 年代ジャーマンメタルの特性と位置づけ——Accept をを中心に」, 第 17 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 6 月 20 日.

渡邊紀子「E・T・A・ホフマン『自動人形』について」, 第 17 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 6 月 20 日.

小田嶋大「ジークフリートとブリュンヒルデの死の非悲劇性——R.ヴァーグナー『ニーベルングの指輪』終幕部における一解釈とヴァーグナーが志向した芸術作品」, 第 18 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 6 月 27 日.

風岡祐貴「バッハマンと「猶予された時」」, 第 18 回ドイツ語圏文化研究会, 2008 年 6 月 27 日.

3 大学院生・学部生等の受賞状況

なし

4 日本学術振興会研究員採択状況

なし

5 留学・留学生受け入れ

5-1 大学院生・学部学生等の留学数

2009年度 大学院 計1名 ボン大学（ドイツ連邦共和国）

5-2 留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
05	1	0	1
06	0	0	0
07	0	0	0
08	0	0	0
09	1	0	1
計	2	0	2

6 社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
05	0	0	0
06	0	0	0
07	0	1	1
08	0	1	1
09	2	0	2
計	2	2	4

7 専攻分野出身の研究者・高度職業人

7-1 専攻分野出身の研究者

なし

7-2 専攻分野出身の高度職業人

新聞社1名，出版社1名

8 客員研究員の受け入れ状況

なし

9 外国人研究者の受け入れ状況

Jaqueline Berndt（横浜国立大学），講演，2005年3月8日。

Andreas Cesana（マインツ大学），講演，2005年10月4日。

Jaqueline Berndt（横浜国立大学），シンポジウム，2005年12月21日。

Beate Loeffler（ドレスデン工科大学，DAAD 奨学研究員），講演，2006年6月1日。

Andreas Cesana（マインツ大学），講演，2008年2月27日。

Hans Esselborn（ケルン大学），講演，2008年5月2日。

10 刊行物

『東北ドイツ文学研究』（専門分野の研究誌）1957年より毎年刊行

11 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

2005年度

講演会：Andreas Cesana（アンドレーアス・チェザーナ，マインツ大学 教授），
2005年10月4日，開催。

学会：東北ドイツ文学会・第48回研究発表会，2005年10月22日，事務局。

シンポジウム：現代文化における「コミック」の遍在—その現状と意義（AGR
フォーラム・第10回），2005年12月21日，開催。

研究会：AGR フォーラム・第11回，2006年3月6日，開催。

2006年度

講演会：Beate Loeffler（ドレスデン工科大学，DAAD 奨学研究員），2006年
6月1日，開催。

学会：東北ドイツ文学会・第49回研究発表会，2006年10月22日，事務局。

2007年度

講演会：副島美由紀氏（小樽商科大学教授），2007年10月26日，開催。

学会：東北ドイツ文学会・第50回研究発表会，2007年11月10日，事務局。

ワークショップ：ナラティブ・メディア研究会第1回ワークショップ，2008
年2月9日，開催協力。

講演会：Andreas Cesana（アンドレーアス・チェザーナ，マインツ大学 教授），
2008年2月27日，開催。

2008年度

講演会：Hans Esselborn（ハンス・エッセルボルン，ケルン大学教授），5月2

日，開催

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第4回研究会，2008年7月11日，開催。

学会：東北ドイツ文学会・第51回研究発表会，2008年11月15日，事務局。

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第5回研究会，2008年12月4日，開催。

2009年度

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第6回研究会，2009年7月21日，開催。

学会：東北ドイツ文学会・第52回研究発表会，2009年10月31日，事務局。

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第7回研究会，2009年10月21日，開催。

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第8回研究会，2009年11月25日，開催。

12 専攻分野主催の研究会等活動状況

2005年度

ドイツ文学研究室論文構想発表会・第1回，7月27日。

同 第2回，10月26日。

2006年度

ドイツ文学研究室論文構想発表会，11月30日。

2007年度

ドイツ語圏文化研究会・第1回，2007年4月18日。

同 第2回，2007年5月9日。

同 第3回，2007年5月11日。

同 第4回，2007年5月25日。

同 第5回，2007年6月8日。

同 第6回，2007年7月6日。

同 第7回，2007年10月24日。

同 第8回，2007年11月2日。

同 第9回，2007年11月9日。

同 第10回，2007年11月30日。

同 第11回，2008年1月11日。

同 第12回，2008年2月20日。

2008 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 13 回, 2008 年 5 月 9 日.

同 第 14 回, 2008 年 5 月 14 日.

同 第 15 回, 2008 年 5 月 28 日.

同 第 16 回, 2008 年 6 月 6 日.

同 第 17 回, 2008 年 6 月 20 日.

同 第 18 回, 2008 年 6 月 27 日.

同 第 19 回, 2008 年 7 月 18 日.

同 第 20 回, 2008 年 7 月 25 日.

同 第 21 回, 2008 年 10 月 24 日.

同 第 22 回, 2008 年 11 月 7 日.

同 第 23 回, 2009 年 2 月 17 日.

2009 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 24 回, 2009 年 5 月 27 日.

同 第 25 回, 2009 年 6 月 5 日.

同 第 26 回, 2009 年 6 月 19 日.

同 第 27 回, 2009 年 7 月 3 日.

同 第 28 回, 2009 年 7 月 10 日.

同 第 29 回, 2009 年 7 月 31 日.

1.3 組織としての研究・教育活動に関する過去 5 年間の自己点検と評価

「研究・教育活動の概要と特色」で述べたように, ドイツ文学専攻分野(以下, 本研究室)は, 伝統的な文学研究を核としながら, 現代の状況に対応すべく, 文化・思想・言語といった方面での研究・教育活動を推し進めることを目標としてきた。

この目標は, 研究面においてはほぼ達成されているものとする。組織とはいえ, 人文学の研究は研究者個々の活動によるものである。所属スタッフはそれぞれに特徴のある研究業績をあげており, 科学研究費補助金の受給件数も多い。また以上に挙げた研究室としての活動の中でも, 外国人研究者を招聘しての講演会やシンポジウムの主催, 学会・研究会等の開催など, この分野としては活発なものであると言える。当研究室は, 東北ドイツ文学会(日本独文学会東北支部)の恒久的な事務局として, 毎年研究発表会の企画・運営と研究誌の刊行を続けている。それ以外にも, 英文・独文・仏文の垣根を払った合同の研究会である「AGR フォーラム」や, 東北大学情報科学研究科と連携した「ナラティブ・メディア研究会」など, 領域横断的な学術活動においても, 本研究室

の教員は企画・運営の中心として活躍している。このように専攻分野の壁を超えた積極的な研究交流に力を入れてきたことは、高く評価できる点であると思われる。

ドイツ文学分野が構造的抱える問題として、従来、学生の少なさが挙げられていた。しかしここ数年は、修士課程への進学者と博士課程社会人研究者コースに入学する学生を得て、全体としては大学院の定員を充足する状況にある。ただ以下に述べる事情もあって研究指向の大学院生を得ることが難しく、課程博士授与の実績が少ないことは反省点であった。ただ2008年度には一名の博士号取得者を出し、2009年度にも2名が博士論文完成の見込みである。指導の成果が現れてきた証拠と考える。2007年度からは従来の論文構想発表会の態勢を見直し、ドイツ語圏文化研究会として新たに研究室内部での発表機会を整備した。大学院生が口頭発表の技術を磨き討議の訓練を積むことを第一目的とするが、学部生に対しても研究上のよい刺激となっている。

かつて本研究室からは多くの研究者が育っていったが、近年、ドイツ語・ドイツ文学分野での研究職ポストが激減している影響を受けて、この5年間大学等への就職実績はない。修士課程修了後、民間企業等に就職することも常態化しており、今後もこの傾向は続くと思われる。そのため、研究室としても、学部卒業者および修士課程修了者への就職活動の支援に力を入れ、文学を学んだ学生を積極的に社会に送り出す態勢を整えつつある。数字には表れてこないが、こうした現実的対応は、目下の状況においては評価されてしかるべきものと考えられる。

学生数が少ないことは、教育指導上はメリットともなる。これも数字には表れないが、大学院学生に対しては、授業や読書会を通じて、学生個々の研究分野に関連したテキストをほぼマン・ツー・マンで講読するなど、きめ細かい教育指導を行ってきた。ドイツ語・ドイツ文学分野で研究者になることが難しく、大学院進学へのインセンティブが急激に低下している中で、この分野に関心を抱く数少ない若者をどのように育成するべきか、模索を続けている状況である。

なお学部においては、特に1年次学生に対して分野の魅力を積極的に紹介する努力を続けた結果、2005年度以降、学生数が増加している。学部学生（研究生を含む）総数は、2002年度7名であったが、2007年度・2008年度は27名と激増し、2009年度には30名と定員の上限に至っている。授業でも、文学研究という核を重視しつつ、多様なニーズに応える工夫を重ねており、そうしたことが、学生の間で一定の評価を受けているものと推察される。

厳しい状況の中で、分野の存続・発展の方向性を模索しながら本研究室が行ってきたこの5年間の研究・教育両面における努力とその成果は、おおむね評価に値するものと考えられる。

Ⅲ 教員の研究活動（2005～2009 年度）

1 教員による論文発表等

1- 1 論文

原研二「物語と死——ゲーテの小説における語りの技法をめぐって」, 『多元的
文化の論理—新たな文化学の創世へ向けて』, 原研二・佐藤研一・松山雄三・
笹田博通編, 東北大学出版会, 3-23 頁, 2005 年 5 月.

原研二『オーストリア小説を中心とする 20 世紀ドイツ語散文の言説分析』(平成
15-17 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書, 研究代表者),
42p., 2006 年 3 月.

HARA, Kenji, “Die essayistische Konzeption *der Kultur der Renaissance in Italien*:
Deutungen aus dem Vergleich der Marginalien mit der Inhaltsübersicht.” In:
Unerschöpflichkeit der Quellen. Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt.
Hrsg. von Urs Breitenstein, Andreas Cesana, Martin Hug. Basel (Schwabe AG)
2007.

森本浩一「脱自としての人間, 陶醉としての芸術——ハイデガーにおける存在論
と芸術論の相関」, 『多元的文化的論理—新たな文化学の創世へ向けて』,
原研二・佐藤研一・松山雄三・笹田博通編, 東北大学出版会, 91-111 頁, 2005
年 5 月.

森本浩一『虚構の認知的効果および社会的機能に関する研究』(平成 16-17 年度科
学研究費補助金(基盤研究(C)) 研究成果報告書, 研究代表者), 計 80 頁,
2006 年 3 月.

森本浩一「「芸術=反終焉論」の射程——芸術終焉論の現代的意味を考えるため
に」, 『芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究』(平
成 16-17 年度科学研究費補助金・基盤研究(A) 研究成果報告書, 研究代表者:
栗原隆), 67-90 頁, 2006 年 3 月.

森本浩一「知覚のリアリティ——『芸術としての力への意志』に見るハイデガー
のアート哲学」, 『東北大学文学研究科研究年報』56 号, 東北大学文学研究
科, 107-131 頁, 2007 年 3 月.

森本浩一「「批評」の位相——文学を語ることはいかにして可能か」, 栗原隆編
『芸術の始まる時, 尽きる時』, 東北大学出版会, 349-371 頁, 2007 年 3 月.

森本浩一「新旧論争と 17 世紀の「言語」観」, 『「新旧論争」に顧みる進歩史観
の意義と限界, 並びにそれに代わり得る歴史モデルの研究』(平成 18-19 年
度科学研究費補助金・基盤研究(B) 研究成果報告書, 代表者: 栗原隆), 1-20

頁, 2008年3月.

森本浩一「表現によって現れ出るもの」, 『コミック研究のフレーム再考のために——研究方法の多様化と今後の展望——』(ナラティブ・メディア研究会第1回ワークショップ報告書, 編集代表者: 森田直子), ナラティブ・メディア研究会, 61-67頁, 2008年3月.

森本浩一「物語認知の比較ジャンル論的考察——物語的他者への自己移入という観点から」, 『ナラティブ・メディア研究会活動報告書 2008年度』, ナラティブ・メディア研究会, 121-145頁, 2009年3月.

Schmitz, Brigitte, “An-sich-selbst-zugrunde-Gehen und der Mangel an “Lebenswürdigkeit”: Betrachtungen zu einem Aspekt der Selbstdeklassierung in Thomas Manns Werk am Beispiel seiner letzten Erzählung >Die Betrogenen<.” 『多元的文化の論理——新たな文化学の創世へ向けて』, 原研二・佐藤研一・松山雄三・笹田博通編, 東北大学出版会, 61-89頁, 2005年5月.

Schmitz, Brigitte, “Einige Betrachtungen zu stigmatisierten Charakteren im erzählerischen und theoretisch-essayistischen Werk Thomas Manns.” 『東北大学文学研究科研究年報』55号, 東北大学文学研究科, 118-140頁, 2006年3月.

Schmitz, Brigitte, “Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil I).” 『東北大学文学研究科研究年報』56号, 東北大学文学研究科, 130-152頁, 2007年3月.

Schmitz, Brigitte, “Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil II).” 『東北大学文学研究科研究年報』57号, 東北大学文学研究科, 30-48頁, 2008年3月.

Schmitz, Brigitte, “Die Spuren Jacob Burckhardts in Thomas Manns Werk – vornehmlich in seinem Renaissancedrama *Fiorenza*.” In: *Unerschöpflichkeit der Quellen. Burckhardt neu ediert – Burckhardt neu entdeckt*. Herausgegeben von Urs Breitenstein, Andreas Cesana, Martin Hug. Basel (Schwabe AG), S.235-249, 2007. (Beiträge zu Jacob Burckhardt. Herausgegeben von der Jacob-Burckhardt-Stiftung, Basel; Band 7)

Schmitz, Brigitte, “Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil III).” 『東北大学文学研究科研究年報』58号, 東北大学文学研究科, 2009年3月.

Schmitz, Brigitte, “Erscheinungsformen des “Dämonischen” im Werk von Thomas Mann – vornehmlich dargestellt am Beispiel des *Doktor Faustus* –.” In: Neue Beiträge zur

Germanistik, Band 7 / Heft 2, 2008. Japanische Ausgabe von “DOITSU BUNGA KU”. Herausgegeben von der Japanischen Gesellschaft für Germanistik (JGG). Sonderthema: Das Dämonische. S. 40-61.

嶋崎啓「他・再帰動詞と他・自動詞の意味的相違」, 『東北ドイツ文学研究』49号, 東北ドイツ文学会, 115-137頁, 2006年5月.

嶋崎啓「再帰動詞と他自動詞の歴史的変遷」, 『日本独文学会研究叢書 042 言語変化の諸相——うちとそと』, 日本独文学会, 57-66頁, 2006年.

嶋崎啓「日独語対照・談話における話し手の聞き手に対する配慮」, 『西日本ドイツ文学』18号, 西日本独文学会, 31-44頁, 2006年6月.

嶋崎啓「ロエスレル起草日本帝国憲法草案におけるドイツ語受動態の日本語訳」, 『ヨーロッパ研究』6号, 東北大学大学院国際文化研究科ヨーロッパ文化論講座, 23-63頁, 2007年3月.

嶋崎啓「中高ドイツ語『イーウェイン』における他・再帰動詞と他・自動詞」, 『東北ドイツ文学研究』51号, 東北ドイツ文学会, 123-145頁, 2008年7月.

竹内拓史「狂気の原因——ゲオルク・ハイム『狂人』」, 『東北ドイツ文学研究』49号, 73-92頁, 2006年5月.

竹内拓史「マールブルク版『ヴォイツェク』批評——QuellendokumentationとDebatte um den Woyzeck-Prozeßの部」, 『子午線——ゲオルク・ビューヒナー論集——』6号, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会, 17-27頁, 2006年9月.

1-2 著書・編著

原研二(代表), 佐藤研一, 松山雄三, 笹田博通編『多元的文化の論理』, 東北大学出版会, 2005年.

原研二『物語と不在——十九世紀オーストリア小説とミュージル』, 東洋出版, 2005年.

岩田美喜・竹内拓史編『ポストコロニアル批評の諸相』, 東北大学出版会, 2008年.

1-3 翻訳、書評、解説、辞典項目等

原研二「ハルトムート・ベーム: ゲーテとアレクサンダー・フォン・フンボルト——現れた関係と隠された関係」(翻訳), 『ゲーテ年鑑』47号, 日本ゲーテ協会, 139-172頁, 2005年.

原研二「アンドレーアス・チェザーナ: ブルクハルトの目で見える歴史と文化(2005

- 年10月4日東北大学での講演)」(翻訳), 『東北大学文学研究科研究年報』55号, 東北大学文学研究科, 141-158頁, 2006年3月.
- 原研二『地球時代を生きる感性』, アンドレーアス・チェザーナ著(沼田裕之・遠藤千晶・中澤武・別所良美・山崎高哉と共訳), 東信堂, 2007年.
- 森本浩一「行為としての文学的経験」, 『ひろの』45号, 財団法人ドイツ語学文学振興会, 20-21頁, 2005年10月.
- 森本浩一「言葉を嫌悪してはいけない」, 『フランス文学研究』26号, 東北大学フランス語フランス文学会, 15-17頁, 2006年2月.
- 森本浩一「アイロニー, 隠喩, カフカ, デイヴィドソン, ユーモア, レトリック」(項目執筆), 大庭健編集代表『現代倫理学事典』, 弘文堂, 2006年12月.
- Schmitz, Brigitte, “Beitrag über Leben und Werk des Germanisten Kenji Hara, Universität Tohoku – aus Anlass seines Todes im Jahre 2008 –.” In: Sammelband der Internationalen Charles-Sealsfield-Gesellschaft, Wien, 2009.
- 嶋崎啓「ハンス・パーシェ『アフリカ人ルカンガ・ムカラのドイツ奥地への調査旅行』」(翻訳, 中島邦雄・島浦一博・島村賢と共訳), 鳥影社, 総134頁中72-89頁, 2005年4月.
- 嶋崎啓「Yasushi Kawasaki: Eine graphematische Untersuchung zu den Heliand-Handschriften」(書評), 『京都大学大学院人間環境学研究所人環フォーラム』18, 京都大学大学院人間・環境学研究科, 68頁, 2006年3月.
- 嶋崎啓「ドイツ語の史的研究・はじめに」(解説), 『東北ドイツ文学研究』51, 東北ドイツ文学会, 83-86頁, 2008年7月.
- 嶋崎啓「根本道也『ドイツの標準語——その生い立ちと辞典の個性——』」(書評), 『九州ドイツ文学』22号, 九州独文学会, 57-59頁, 2008年11月.

1-4 口頭発表

- 原研二 “Die essayistische Konzeption der «Cultur der Renaissance in Italien»: Deutungen aus dem Vergleich der Marginalien mit der Inhaltsuebersicht,” 国際ヤーコプ・ブルクハルト学会(スイス, バーゼル), 招待講演, 2006年9月.
- 原研二「歴史の可能性と物語の可能性——ヘルダー, ゲーテ, ブルクハルト(ブルクハルト校訂版全集編集の現場から)」, 2006年日本ヘルダー学会秋季研究発表会シンポジウム, 特別講演, 2006年11月.
- 森本浩一「芸術終焉論を読み解く」, 日本ヘーゲル学会第3回研究大会シンポジウム, コメンテーター, 2006年6月.

- Schmitz, Brigitte, “Endzeiten – Zeitenden. Diskurse über das Ende” Arbeitsgruppe 1A
(Arbeitstext: Thomas Mann: *Doktor Faustus*), 日本独文学会・第48回蓼科ゼミナール, 部会主宰, 2006年3月.
- Schmitz, Brigitte, “Die Figur des Gastes – weder Feind noch Freund” Arbeitsgruppe 4A
(Arbeitstext: Thomas Mann: *Der Tod in Venedig*), 日本独文学会・第49回蓼科ゼミナール, 部会主宰, 2007年3月.
- 嶋崎啓「他動詞の反使役化の諸相——再帰動詞と他自動詞を中心に」, 京都ドイツ語学研究会, 口頭発表, 2005年9月.
- 嶋崎啓「再帰動詞と他自動詞の歴史的変遷」, 日本独文学会 2005年度秋季研究発表会シンポジウム「言語変化の諸相——うちとそと」, パネル, 2005年10月.
- 嶋崎啓「歴史的に見た未来形 werden+不定詞」, 日本独文学会 2006年秋季研究発表会シンポジウム「歴史的に見た現代ドイツ語」, パネル, 2006年10月.
- 竹内拓史「ナチズムに利用された革命家——G・ビューヒナーの自然科学研究とナショナリズム」, 平成17東北大学萌芽研究育成プログラム採択課題「ポストコロニアルテキストのアイデンティティ——表象比較文化史的研究」第3回研究発表会, 口頭発表, 2006年2月.
- 竹内拓史「マールブルク版『ヴォイツェク』テキスト・クリティーク」, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会第8回研究発表会, 谷口廣治との共同口頭発表, 2006年6月.
- 竹内拓史「「クラールスの鑑定書」と「シュモリング鑑定書」について——その訳出上の問題点を中心に」, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会第9回研究発表会, 口頭発表, 2007年6月.
- 竹内拓史「ヴォイツェク裁判について——クラールス鑑定書の解題との関係で」, 日本ゲオルク・ビューヒナー協会 2007年度秋期研究発表会, 口頭発表, 2007年10月.

2 教員の受賞歴 (2005~2009年度)

- 原研二：第二回オーストリア文学研究会賞 (鈴木隆雄編集主幹『オーストリア文学小百科』に対して, 編者のひとりとして), オーストリア文学研究会, 2006年.
- 原研二：第三回オーストリア文学研究会賞 (著書『物語と不在』に対して), オーストリア文学研究会, 2007年.

IV 教員による競争的資金獲得（2005～2009年度）

（1）科学研究費補助金

2005年度

原研二（研究代表者）：基盤研究(C)「オーストリア小説を中心とする20世紀ドイツ語散文の言説分析」，600,000円

原研二：平成17年度科学研究費補助金・研究成果公開促進費，1500,000円

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構の認知的効果および社会的機能に関する研究」，600,000円

森本浩一（研究分担者）：基盤研究(A)「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」，575,000円

2006年度

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」，1,600,000円

森本浩一（研究分担者）：基盤研究(B)「『新旧論争』に顧みる進歩史観の意義と限界，ならびにそれに代わり得る歴史モデルの研究」，529,000円

2007年度

原研二（研究代表者）：基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」，1,950,000円

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」，1,040,000円

森本浩一（研究分担者）：基盤研究(B)「『新旧論争』に顧みる進歩史観の意義と限界，ならびにそれに代わり得る歴史モデルの研究」，555,000円

Schmitz, Brigitte（研究分担者）：基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」

2008年度

原研二（研究代表者）：基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「虚構における物語認知の比較ジャンル論的研究」，780,000円

Schmitz, Brigitte（研究分担者）：基盤研究(C)「19世紀のドイツ語の歴史記述と物語記述の比較分析研究」

嶋崎啓（研究代表者）：基盤研究(C)「ドイツ語における文法化現象の実証」，

1,300,000 円

2009 年度

Schmitz, Brigitte (研究代表者) : 基盤研究 (C) 「19 世紀のドイツ語の歴史記述
と物語記述の比較分析研究」, 900,000 円

嶋崎啓 (研究代表者) : 基盤研究(C) 「ドイツ語における文法化現象の実証」,
1,170,000 円

(2) その他

2006 度

竹内拓史 (研究分担者) : 東北大学萌芽研究育成プログラム——ポストコロニ
アルテキストのアイデンティティ表象比較文化史的研究, 2,000,000 円 (2005
～2007 年度全体額)

2007 度

竹内拓史 (研究分担者) : 同上

V 教員による社会貢献 (2005～2009 年度)

原研二 (2005 年度) : 仙台日唄協会での講演会「ウィーン 文化の万華鏡」, 講
師, 仙台ホテル, 2005 年 6 月 27 日.

原研二, Schmitz, Brigitte (2008 年度まで継続) : 校訂版『ブルクハルト全集 (イ
タリア・ルネサンスの文化)』の編集, J. Burckhardt: *Die Cultur der Renaissance
in Italien*, JBW [Jacob Burckhardt Werke, Kritische Gesamtausgabe, 27 Bände, Bd.
4, München (C. H. Beck) / Basel (Schwabe AG) 2000 ff.]

森本浩一 (2007 年度) : 平成 19 年度第 1 回仙台電波高等専門学校専攻特別講義 (第
143 回定例談話会) 「メタファーを考える」, 講師, 仙台電波高専, 2007 年 5
月 18 日.

嶋崎啓 (2006 年度) : 武蔵台高等学校キャンパスセミナー講演, 講師, 福岡県立
武蔵台高校, 2006 年 7 月 31 日 嶋崎啓 (2009 年度) : 第 2 期斎理蔵の講座「私
の見たドイツ」, 講師, 丸森町民センター, 2009 年 7 月 4 日.

竹内拓史 (2006 年度) : 利府高等学校講演会「ドイツの現代事情について」, 講
師, 宮城県立利府高校, 2006 年 11 月 1 日.

VI 教員による学会役員等の引き受け状況（2005～2009 年度）

原研二

日本独文学会東北支部長（2005～2007 年度）

東北ドイツ文学会会長（2005～2007 年度）

日本ゲーテ協会理事（2005～2007 年度）

ゲーテ賞選考委員（2005～2006 年度）

日本独文学会賞選考委員（2005～2006 年度）

森本浩一

東北ドイツ文学会委員，『東北ドイツ文学研究』編集委員（2005～2009 年度）

日本独文学会東北支部長（2008～2009 年度）

東北ドイツ文学会会長（2008～2009 年度）

嶋崎啓

東北ドイツ文学会委員，『東北ドイツ文学研究』編集委員（2005～2009 年度）

日本独文学会語学ゼミナール実行委員（2006～2009 年度）

日本独文学会編集委員（2009 年度）

ドイツ語学文学振興会ドイツ語技能検定試験会場責任者（2009 年度）

竹内拓史

東北ドイツ文学会事務局（2006 年～2008 年）

日本ゲオルク・ビューヒナー協会編集委員（2007 年）

日本ゲオルク・ビューヒナー協会事務局長（2008 年）

VII 教員の教育活動（2009 年度）

（1）学内授業担当

1 大学院授業担当

森本浩一

ドイツ文学研究演習 I, II

シュミッツ，ブリギッテ

ドイツ文学研究演習 III IV

ドイツ文化学研究演習 I, II

嶋崎啓

ドイツ文化学特論 I, II

2 学部授業担当

森本浩一

人文社会科学総論

ドイツ文学概論 I, II

ドイツ文学演習 I, II

ドイツ語学演習 I, II

シュミッツ, ブリギッテ

ドイツ語学基礎講読 I, II

ドイツ文学演習 III, IV

ドイツ語学演習 III, IV

嶋崎啓

人文社会科学序論

ドイツ語学概論 I, II

ドイツ語学各論

3 共通科目・全学科目授業担当

森本浩一

基礎ドイツ語 I, II

嶋崎啓

基礎ドイツ語 I, II

専門ドイツ語

シュミッツ, ブリギッテ

展開ドイツ語 I, II

(2) 他大学への出講 (2005~2009 年度)

森本浩一

青山学院大学 (2008~2009 年)

放送大学福島学習センター (2009 年)